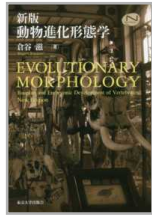


● 医学分館 2F 開架書架(第三) 487/DOU  
 ● 本館 2F 一般書架 487

## 新版 動物進化形態学

倉谷 滋著 東京大学出版会



脊椎動物の解剖学，特に頭部の構造は非常に複雑で，学ぶのに苦労する分野である。医学生にとって咽頭弓やブラコード，ロンボメアなどの概念は，理解する対象というよりは，丸暗記する事項となりがちであろう。この難解な頭部の解剖学に対し，系統発生と個体発生の観点から明快な解釈を与えてくれるのが，本書である。本書は，頭部が体幹の延長なのか否かという問題を中心に据え，系統発生を脊索動物から辿り，また科学史をゲーテの頭蓋椎骨説まで遡る。ゲーテの創始した形態学Morphologieが，反復説や進化論と絡み合い，現代の進化発生学に昇華していく様は，実にドラマチックである。

本書では頭部分節説の検証に留まらず，解剖学における様々な論点に対し，最新の発生学の知見に基づく議論を展開している。例えば，副神経の分類に関する論考

(p215, 表4-1) では，この神経が頭部と体幹の境界に存在するが故に，そのidentityが曖昧になっていることを分子と形態の双方から見事に解き明かしている。

本書のもう一つの楽しみ方は2004年の旧版との読み比べである。わずか10数年の間に発表された新知見が進化発生学をガラリと変えた様を目の当たりにすることができる。軸上epaxial/軸下hypaxial筋という分類を補完するべく提唱されたPrimaxial/abaxial領域という概念 (p195, 図4-56) は，肋間筋と体肢筋の分化を明確にした。また，第10章として新たに加えられた円口類の形態学は，無顎類と顎口類との間に安易な相同性を設定することへ警鐘を鳴らしている。

本書は解剖学の入門書とは対極の位置にあるが，発生学の一般教科書では満足できなくなった学生にとって，理解のレベルを大きく引き上げてくれる貴重な一冊である。



医学部解剖学講座構造生物学教室

おだ としゆき

小田 賢幸 教授

● 本館 2F 一般書架 778.21

## 日中映画交流史

劉 文兵著 東京大学出版会



読者の皆様は1980年代の中国における高倉健の人気をご存じだろうか。

本書は1920年代から近年までの日本と中国の映画交流史である。テレビが普及し人々の往来が便利になった今日，国境を越えた文化交流の媒体はテレビドラマやアニメーション，アイドルやアーティストのコンサートなど多様化しつつある。しかし20世紀の日中両国の文化交流において映画の影響力は絶大であり，映画史を紐解くことで，両国民が互いに互いに関心を向けあってきたか，中国の人々が映画を通して日本から何を感じ取ったのかを知ることができる。それと同時に，膨大な歴史資料に基づく本書の記述は，時としてパターン化した思考や内向きな態度が相互理解の障害になることを私たちに教えてくれてもいる。

中国における日本映画の上映は20世紀初頭から行われていたが，日中国交正常化後まもなく起こった日本映画ブームの中心的存在は高倉健であった。私たちは日本で人気の高い映画は中国でも人気を得る，両国民の感性は近似している，と受け止めるかもしれないが，本書はそのような理解を否定する。中国には中国の事情が有り，日本とは別の事情で高倉健ブームが巻き起こったのである。

今日では中国の映画で見た北海道の美しい風景をめぐって来日する中国人観光客も多い。本書は，文化交流で必要とされる「〈他者〉に対する冷静な眼差し」のありかたを，映画史の記述を通して私たちに伝えている。



教育学部言語教育講座

まちだ しげる

町田 茂 准教授

